

早稲田社会学会ニュース 第28号

2006年11月23日発行

早稲田社会学会事務局
〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学部 社会学研究室内
Tel: 03-5286-3742
E-mail: socio-office@list.waseda.jp
URL : <http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

今回のニュースの内容

1. 第58回早稲田社会学会大会の報告
2. 早稲田社会学会総会の報告
3. 研究例会の報告
4. 2005年度研究助成の報告
5. 2006年度の研究助成について
6. 入退会者のお知らせ
7. 学会費納入のお願い

1. 第58回早稲田社会学会大会の報告

第58回早稲田社会学会大会は、2006年7月1日（土）に早稲田大学文学部 第一会議室において開催されました。報告者および報告題目、司会者、討論者は次のとおりです。

一般報告

司会者：周藤 真也（早稲田大学） 木村 正人（早稲田大学）

報告者：伊藤 聡洋（早稲田大学文学研究科）： 宗教をめぐる近代化論の諸相

関水 徹平（早稲田大学文学研究科）： 「社会性」概念の再検討

小林 杏（早稲田大学文学研究科）： 死児写真をめぐる考察

河野 昌広（早稲田大学文学研究科）： 現代の四国遍路に見るスピリチュアリティ

熊本 博之（明星大学・早稲田大学）： 迷惑施設建設問題と地域ケイパビリティ

——辺野古住民によるある試みを事例に

池田 祥英（早稲田大学）： 同時代の欧米におけるタルド社会学の受容について

シンポジウム

テーマ：「文化の社会学の可能性」

報告者：伊藤 守（早稲田大学）： ポストモダニティにおける文化<と>政治を問い直す

——テレビ文化の研究から

長谷 正人（早稲田大学）： ポストモダンの終焉をめぐって

佐藤 郁哉（一橋大学）： フィールドワークによる文化研究

——素朴反映論と読“社”感想文を越えて

討論者：若林 幹夫（早稲田大学）

司会者：山田 真茂留（早稲田大学）

<シンポジウム報告> 周藤 真也（早稲田大学）

このシンポジウムは、前期の研究活動委員会が、社会学をすることをめぐってシンポジウムを開催してきたのを受けて、「文化」のレンズを通して社会学をみることを目的として企画したものである。文化的社会的諸現象の記述は、さまざまところで試みられてきておりそれなりの蓄積があるが、方法論的基礎付けがいまひとつ希薄ではなかったか。本シンポジウムは、このような問題意識のもと、諸学会において同様のテーマでシンポジウム等が開催されてきた中、いま改めて「文化の社会学の可能性」を問うたものである。

第一報告者の伊藤守氏（早稲田大学）からは、カルチュラル・スタディーズ（以下、CS）を中心にして文化研究にアプローチしてきた立場から、表象文化のなかの「政治」を論じてきたCSに対して、もはや論じなくてもわかるような状態が生じてしまった今日のポストCS的文化状況において、いかにしてメディアのリアルや快楽に迫るのかということテーマに報告があった。伊藤氏は、自らのマルチモダリティ分析において、「感情」や「情動」、「生理的なもの」の問題系が焦点として浮上してきたという経験を踏まえて、CSの研究がメディア論と同様に「読み手」としての「主体」を前提にして世界を捉えてきたことに反省を促す。そして、CSとメディア論の「近代批判」の「知性」を引き継ぐならば、CSが行ってきたテキストと読みよりも、身体性のレベルにおいて文化<と>政治の問題を捉える必要性が主張された。

このように伊藤氏は、現在の状況をポストモダニティとして捉えたのに対して、第二報告者の長谷正人氏（早稲田大学）は、ポストモダン文化のはじまりを1979年前後に、終わりを1995年前後に置き、現在の状況を「ポストモダンの終焉」後として捉えた。長谷氏は、脱構築的な常識崩しを行ってきたポストモダンの社会学が、「虚構」としての現実と虚構的に戯れるポストモダンの文化と相即的であったのに対し、1995年頃からメディア文化や若者文化を楽しそうに論じることをやめ、政治や社会的現実を真面目に問題とするようになったことを指摘する。こうした現在においてポストモダン（の社会学）を脱構築するためには、「戦後」と「ポストモダン」のあいだにある1970年代を現在との関係で考え直す必要があることが主張された。

第三報告者の佐藤郁哉氏（一橋大学）からは、自らのこれまでの調査経験をもとに、文化研究は、世相や民衆の心情が即文化に反映するかのような「素朴反映論」に陥るのではなく、①文化の内容についての詳細な分析、②文化的現象以外のデータを用いた綿密な分析、③文化と社会の対応関係の分析、④文化の生産・流通、消費の実際のプロセスについての分析、をともなった文化生産論に依るべきことが主張された。この主張は、「素朴反映論」が依存するのは、テキスト解釈の「剃刀の切れ味」であるのに対して、文化研究が目指すべきなのは何度も試行することによって達成される「鉋の切れ味」であるということによって表現された。

以上の報告に対して、討論者の若林幹夫氏（早稲田大学）からは、2006年の現在において、また日本の社会学の文脈において、文化の社会学の可能性と社会学を行うことのリアリティを問うことの必要性が主張され、この観点から各報告者に対して何点かの疑問が提起された。若林氏からの質問とそれに対する各報告者の応答をここで具に紹介することはできないが、伊藤氏に対して焦点化しようとしているのは感情や情動の問題ではなく「ギョーカイ」的なノリの問題ではないかという指摘、長谷氏に対して「文化の社会学」の道を細くしてしまっている可能性の指摘、佐藤氏に対してテキスト自体がもっている現場性の指摘、があったことを紹介しておく。

各報告者から討論者に対する応答の後、フロアも含めてさまざまに有意義な議論が展開された。今回のシンポジウムは、例年にも増して多くの聴衆があり、「文化の社会学」が依然として高い関心を集めていることを感じたとともに、短い時間のなかで十分に議論を尽くすことができなかつたことはいささか残念であった。しかしながら、司会の山田真茂留氏（早稲田大学）が、登壇者の方々が共通して文化研究者である前にひたすら「社会学者」であったと指摘したように、文化研究を通して登壇者のいずれもが社会学をすること

への問いとつながっていた。そうした意味において、本シンポジウムの所期の目的は概ね達成されたのではないと思われる。

2. 早稲田社会学会総会の報告

2006年7月1日に、大会に引き続いて開催された総会において以下の事項が報告されました。

- 1) 理事会および研究活動委員会、編集委員会の活動報告（2005年7月～2006年7月）
- 2) 2006年度研究助成の申請と採用の経過について
- 3) 規約改正について

2005年7月2日に行われた総会において、庶務委員会より規約の改正案が提案され、審議の結果、承認されましたが、正式な手続き（会則第22条）を経ていないことが判明しました。次回の総会にて再度規約改正を提案し、審議することとなりました。

- 4) 記念出版事業について

また、同総会において以下の議案が提案され、慎重な審議の結果、すべて原案どおり可決されました。

- 1) 2005年度決算案の審議と承認（同封の決算報告をご参照ください）
- 2) 2006年度予算案の審議と承認（同封の予算報告をご参照ください）

3. 研究例会の報告

第27回研究例会（2006年度第1回）が、以下のとおり開催されました。

■第27回研究例会■

日時：2006年5月27日（土） 14:00-17:00

会場：早稲田大学文学部（戸山キャンパス）第七会議室（39号館4F）

司会者：大貫恵佳（早稲田大学）

報告者および題目：

石渡雄介（東京都立大学大学院）

「プリズムとしての文化：都市・サブカルチャー・ラディカルエスノグラフィー」

清水知子（筑波大学）

「現代英国における多文化主義の陥穽と文化の論理」

<研究例会報告>

本例会は、大会シンポジウム「文化の社会学の可能性」のプレ企画として行われた。石渡報告は、サブカルチャー研究のための方法論を模索した。そこでは、テリトリーを所与とせず人びとのネットワークを捉えることと、集合的エスノグラフィーの重要性が指摘された。清水報告は英国文学、とりわけブッカー賞という「文化装置」から多文化主義の問題を論じた。清水氏はブッカー賞をめぐる言説の中で大英帝国が空虚な普遍的な位置を占有し、かつ、その位置が功利主義と癒着するありようを指摘した。質疑では、石渡氏の専門であるクラブカルチャーや、清水報告の中で言及された対抗文化の具体的可能性などに主に関心が寄せられた。多くの参加者とともに有意義な議論ができたと思う。

（研究活動委員：大貫 恵佳）

4. 2005 年度の研究助成報告について

昨年度の研究助成の対象は、次の 3 つの研究でした。

- 1) 研究題目：「社会学の成立と発展におけるガブリエル・タルドの役割について」
研究代表者：池田 祥英（早稲田大学）
助成額： 10 万円
- 2) 研究題目：「現代日本の巡礼・遍路に見るスピリチュアル文化の諸相の研究——
ウェブコミュニティの分析を通して」
研究代表者：河野 昌広（早稲田大学院文学研究科）
助成額： 10 万円
- 3) 研究題目：「サブカルチャーに関する文化産業論的研究——
オタク現象の構造連関分析を中心として」
研究代表者：七邊 信重（早稲田大学院文学研究科）
助成額： 10 万円

このたび、2005 年度研究助成の対象となった研究成果の概要について以下の報告書が提出されました。

「社会学の成立と発展におけるガブリエル・タルドの役割について」 池田 祥英（早稲田大学）

今回の研究では、①タルド理論が同時代の社会学者の理論のなかにもどのように受容されたか、②社会学の制度化の過程においてタルドがいかなる位置を占め、どのような役割を果たしたのか、という二つの問題を検証することを目的とした。①の受容の問題については、タルドから比較的大きな影響を受けたと思われる同時代の社会学者（R.ウォルムス、G.リシャール、F.H.ギディングス、米田庄太郎など）の学説を検討して、タルドの所論と比較する作業を行った。また、実際の影響関係を裏づけるために、タルドとこれらの論者の間に交わされた書簡を保管しているパリ政治学院の 20 世紀欧州史センターにおいて資料調査を行った（2006 年 3 月）。また、②の社会学の制度化の問題については、先行研究において指摘されているとおり、コレージュ・ド・フランスの心理学講座教授であった Th.リボーや、文部省高等教育局長であった L.リアールなど、社会学の制度化に人力したといわれる人々や、パリ政治学院の前身である政治学自由学校を創立し、タルドにそこでの講義を依頼した E.ブートミーとの関わりを中心に、同じくパリ政治学院所蔵の書簡を中心に調査した（なお、こうした書簡関係資料については、現段階では引用許可が下りていないため、これまでに申請者が公表した成果にはまだ盛り込まれていないことをお断りしておく）。

①の受容の問題については、タルドのもとに留学し、その後タルドと同じような心理学的社会学説を唱えた米田庄太郎におけるタルド社会学の受容について、論文を公表した。米田が群集や経済心理、犯罪などタルドが深く掘り下げた領域に関心を持っていることから、米田社会学におけるタルドの影響は、純正社会学のような理論的側面だけにとどまらず、その実践的側面においても見られることを明らかにした（池田「20 世紀初頭におけるタルド社会学の受容：米田庄太郎の場合」『ソシオロジカル・ペーパーズ』第 15 号、2006 年）。一方で、欧米における受容については、タルドと同時代のフランスとアメリカの社会学者を中心に学会大会において発表を行った。フランスにおいては、タルドの社会学は明確な形の継承者を見出すことはできないものの、社会有機体論のウォルムスやデュルケム学派のリシャールなど、対立陣営にいた論者を心理学的アプローチに近づけたという点で、フランス社会学の方向性に一定の影響を与えたといえる。またアメリカでは、ギディングスやロスなど、タルドと似たような心理学的社会学理論を見出すことができ、より直接的な形でタルドの影響があったと考えられる（池田「同時代の欧米におけるタルド社会学の受容について」第 58 回早稲田社会学会大会一般報告、2006 年）。

②の社会学の制度化におけるタルドの位置づけについては、J.ミレらの先行研究ですでに指摘されているとおり、リボーや、リアールなど、デュルケムによる社会学の制度化に協力した人物が関与していることが書簡においてもある程度裏づけられている。今後の研究においては、こうした協力者たちの動向をさらに詳しく検討していく予定である。

「現代日本の巡礼・遍路に見るスピリチュアル文化の諸相の研究——ウェブコミュニティの分析を通して」
河野 昌広 (早稲田大学大学院文学研究科/関東学院大学非常勤講師)

本研究では日本の代表的な巡礼である四国遍路を中心にとりあげた。現代の四国遍路においては、巡礼者の多くが、自らを無宗教・信仰無しと捉えるにも関わらず、外面から見ると、極めて宗教的な行為をしている。このような、一見矛盾するような言動と行為をつなぐ概念として、報告者は、近年の宗教社会学の成果を踏まえ、スピリチュアリティを提唱する。

スピリチュアリティを分析するために、巡礼体験者が自分の経験をインターネット上で公開し、そこでコミュニケーションが交わされているテキストデータを収集し、内容の分析を行った。そこでは、巡礼を開始する当初は無宗教・信仰無しとしていながら、巡礼を実践する中で、何らかの変化や気づきを得ているということが明らかになった。それは特定の宗教に回帰するものではなく、あくまで漠然としたものではあるのだが、何らかの超越性(あるいはつながり)に対する気づき・経験であるといえる。これらの成果は、第13回「宗教と社会」学会大会のテーマセッション「現代スピリチュアリティ文化の学際的研究」で報告を行った。

インターネット上のテキストデータの収集とあわせて、四国遍路の個人ホームページ・ブログの運営者へのヒアリング調査も実施した。その中で、ウェブコミュニティの中での四国遍路における変化のプロセスは二重のプロセスがあることが明らかになった。それは、四国遍路の体験記に見られる「無宗教」→「変わる」のプロセスと、その個人ホームページ・ブログを通じて他者と「語り合い」、何かに「気づき」、そして「変わる」という二重のプロセスである。この二つのプロセスは互いに影響を与え合っている。これについては、10月開催予定の国際宗教学会(Society for the Scientific Study of Religion)大会で報告を予定している。

以上の研究から得られた知見を図式化すると、次のようになる。

無宗教・信仰無し→四国遍路の体験→気づく→変わる→再生・癒し

報告者は、このような図式を四国遍路におけるスピリチュアリティのモデルの一つとして捉えて、月刊アジア遊学 84『アジアのスピリチュアリティ』(勉誠出版)の中で、「現代の四国遍路におけるスピリチュアリティ」(194-204頁)として成果を発表した。

「サブカルチャーに関する文化産業論的研究——オタク現象の構造連関分析を中心として」

七邊 信重 (東京大学大学院情報学環)

申請者は、これまでの研究の中で、ポスト高度成長期に出現した「オタク」と呼ばれるアニメやマンガのコアなファンが、ポピュラー文化を媒介として、社会的アイデンティティを共有する「コミュニティ」と、ファン・フィクションの製作やコスチューム・プレイのような「文化」を形成していることを明らかにしてきた。そしてこの研究の過程で、日本のポピュラー文化産業の通底部に蠢くアマチュアのコミュニティが、優れた人材を育成し革新的な文化的表現物(コンテンツ)を産業に供給しているという、アマチュア・コミュニティと産業界との複雑で潜在的な相互連関に関心をもつようになった。

そこで本研究では、文化社会学や組織・制度論の枠組みを用いて、デジタルゲームを事例とした分析をおこなった。具体的には、家庭用ゲーム産業の停滞・縮小と、PCゲーム、とりわけアマチュア制作のゲームの活況の社会的・歴史的な背景、両者の連関関係等を明らかにすることを目的とした。そしてこの目的を達成するため、ゲーム企業やアマチュア・コミュニティのゲーム制作者への聞き取り調査、開発現場への参与観察、デジタルゲーム産業やオタク・コミュニティに関する文献のレビューという方法を選択した。

この調査研究により次の2つのことが明らかになった。第1に、家庭用ゲームの内容の同質化とPCゲームの物語の多様化は、それが生産される場における開発コストの回収可能性と密接に関連している。家庭用

ゲーム場では、高額な開発コストの回収のためにマス市場を意識した一般受けするゲームが制作される。これに対し、開発コストが低くその回収が比較的容易で、しかもハードウェアメーカーによるゲーム内容の規制がないPCゲーム市場では、美少女キャラクターや性表現をゲーム内に入れることによりマニア層の一定の購買を確保しつつ、年齢が高い層やより狭い層をターゲットに絞ったゲームを制作するという戦略をとることができ、独創的・実験的なPCゲーム、とりわけアマチュアのPCゲームが産み出される条件となっている。

第2に、アマチュアの活発なゲーム制作活動には、ゲーム制作を支援する機材・ツール・情報や、制作されたゲームの流通を可能にするインターネット環境の充実という社会的状況が大きく関連している。インターネット上で入手できるフリー素材（制作ツール・画像・音楽）で手軽にゲームを開発でき、それを公開できるインターネット環境は、アマチュアのゲーム制作を動機づける大きな要因になっている。

本研究の成果は、すでに学会・学会誌で報告されている（「文化創造の条件——2つのゲーム『場』の文化生産論的考察から」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』51、「アマチュアとコンテンツ創造——パソコン用ゲーム制作の文化社会学」『ソシオロジカル・ペーパーズ』15）。またサークル活動などに見られるアマチュア・コミュニティにおける学習プロセスについても、今後継続的に発表をおこなっていく予定である。

5. 2006年度の研究助成について

2006年度の申請について1件の申し込みがあり、以下のとおり決定した。

2006年度研究助成

- 1) 研究題目：「現代日本における対人サービス労働経験についての研究
—生活保護ケースワーカーを事例として—

研究代表者：小村 由香（早稲田大学文学研究科）

助成額： 15万円

6. 入退会者のお知らせ

理事会において以下6名の入会が承認されました。（以下、敬称略）

2005年6月11日理事会

関水 徹平（早稲田大学大学院文学研究科） 伊藤 聡洋（早稲田大学大学院文学研究科）
小林 杏（早稲田大学大学院文学研究科） 平峰 恵利花（早稲田大学大学院人間科学研究科）
小林 真生（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科）

2005年7月2日理事会

水澤 良子（早稲田大学大学院人間科学研究科）

以下の会員（2名）の退会が承認されました。

中 正樹（千里金蘭大学） 榎 彰徳（近畿大学）

7. 学会費納入のお願い

本年度の学会費が未納の方、および過年度分の未納がある方宛てに、振り込み用紙（お名前と該当の未納年度を印字しております）を同封いたします。早急にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。なお、本状と入れ違いになりました節はご容赦ください。

口座番号：00100-3-38020（郵便振替）

加入者名：早稲田社会学会

（年会費：一般会員 5,000 円 学生会員 3,000 円）

複数年度分の会費を納入される場合、および転居・異動などがあった場合には、通信欄にその旨を明記ください。

会費を3年分以上滞納されますと、2000年7月8日の総会決議および2000年12月16日の理事会決議にもとづき、会員資格の一部が停止されます（次の3つの権利が失われます。①学会大会で報告すること ②『社会学年誌』へ投稿すること ③『社会学年誌』の配布を受けること）のでご注意ください。

2000年12月16日の理事会決議にもとづき、事務局では「未納会費の一部が納入された場合には、1997年度以降の最も古い年度の未納分から優先的に充当」する処理をとっております。したがって、本年4月以降にお振り込みいただいた会費が、本年度（2005年度）分ではなく、過年度の未納分として充当されている場合もあります。ご了承ください。なお、年会費の納入記録についてのお問い合わせなどがありましたら、事務局（socio-office@list.waseda.jp）までご連絡ください。

以上